水の都の乙女

姫青

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
水の都の乙女

【Ｎコード】
Ｎ５１６８Ｙ

【作者名】
姫青

【あらすじ】
チートな兄姉をもつ主人公が異世界トリップしちゃうお話。目が覚めたら……お城ですね、此処。平凡な女子高校生が男装させられたり、乙女になったり……ってお兄ちゃん、お姉ちゃん！？なんで此処にいるんですか！！？木佐原兄妹の異世界トリップ物語、末っ子編スタートです！！＊逆ハー風味の恋愛ファンタジーになる予定です。

プロローグ：騎士と聞いて想像するものはなんですか？

ぽてり・・・と鈍い音を響かせそしゃくするはずであったみかんがコタツの上に落ちる。
「開いた口が塞がらない」とはこのことだと実感する。
１１月２７日土曜日９時２７分。
クリスタルヒ〇シ君の某番組を見ていた私、木佐原希は声を大にして叫んだ。

「さっさと引退しろ！！」
ビシッと人差し指をテレビに向けのけぞってみせる。
「うっさい」
人の感情を無視して間髪いれずに投げつけられる姉の冷たい声に少し苛立ちながらも口をつぐむ私。

うん、だってさ。文句なんていってみ？
分殺ですよ。分殺。
多分秒殺もできるだろうけど、じりじりと苦しめるのが好きなお姉様断言しよう、あなたはドＳだと。
経験者にはわかるのです。
あの時のにっこり笑顔は氷の女王様のものだったと！！

そしてそこで口を開けて寝ているお兄様？
もともとはあなたのせいですよ！！？
いくら顔がよくてもあの時のことは一生忘れないからね……
この桁外れ兄姉めっ！
容姿端麗、頭脳明晰、と、まぁいわゆるチートですよ。この二人は。

ちょっと、過去の事がフラッシュバックしたが
まだ、熱はおさまらないので声には出さず脳内で批判大会をはじめる。

（みなさん、「騎士」と聞いて想像するのはなんですか？
えぇ、はい。そうですね、イケメンですよね？細マッチョですよね？
わかります、わかります。
世の乙女はそれを望んでいるんです。
決して、お腹の出ている老人を望んでいるのではありません。
ハゲもお断りなのです。
そうなんです。

……だから早く引退してそこの孫にその服きせやがれ、おっさん！
！）

思わず人差し指をビシッとテレビに向けると、またしても横から
「邪魔」
という氷の女王様ボイスが聞こえてくる。

しまったとおもい、横目でちらちらと姉の横顔を伺う。
もちろん警戒度ＭＡＸで。
我が姉はキレると物をなげてくる。
ケータイ、消しゴム、ティッシュ、エトセトラ、エトセトラ……。
幸い、今まで凶器となるものはなげてこなかったけれど。
しかしチートな姉だ、たとえティッシュでも皮膚が赤くなるくらいにはなる。

警戒という名のオーラをだし神経をとぎすましている私を姉は一瞥し、
「鯉にエサあげてきて」
と冷たく言い放った。

……了解です、ボス。

先ほど落としてしまったみかんを口にほおりいれ
掛けてあった羽織りに袖を通し、庭に出る。
澄んだ夜空に浮かぶ月に照らされた日本庭園をかけると
その足音が聞こえたのか池の鯉がぴちゃぴちゃと跳ねる。

「……ありがたくお食べー、私がこの寒い中ご飯もってきてあげたんだから」
エサを投げ入れると争奪戦が始まった。
その様子を近くで膝を抱えて観察する

（あいつ……
ふと目に付いた一匹の錦鯉。似ている。
誰に？もちろん騎士団のハゲでデブなおっさんに！！）

一度冷めていた苛立ちがふつふつと沸き起こる。

（あれはないよなー、騎士団とか言われたら期待しちゃうじゃん。
……平均年齢高すぎなんだよ。）
「はぁ～～～」
深く長いため息をつく。

さっき見ていた某番組でとある紳士の国の騎士団が紹介されていた。
私も世の乙女の一員であるからして、騎士団とやらに期待していた。

（なのに！！ＣＭも２つもはさんだくせに出てきたのは平均年齢６４．８歳の
おっさん集団だったなんて、誰が求めた！！
しかも、その横の孫！！笑ってないであんたがあの服着なさいよ！
というかプロデューサーでてこい！
この私がじっくりと需要と供給についてお話してあげようじゃないか、フフフフ……）

そうして一人ぶつくさ文句を言っていた私は気づかなかった。
背後に人がいることに。
そして、その人の手が私に伸びていることに。

ばっしゃーん

盛大な音と共に私は池に落ちた。

否、落とされた。
何者かによって。

プロローグ：騎士と聞いて想像するものはなんですか？（後書き）

ここまで読んでいただきありがとうございます。
初めての作品ですが、お付き合いいただければ幸いです。

第1話：生活リズムは崩せない（前書き）

やや下品ネタです。ご注意ください。

第1話：生活リズムは崩せない

十一月の水は冷たい。
冷たいというより小さい針で刺されているかのような痛さだ。
中学生のとき水泳部に所属していたのですでに体験済み。
プール掃除のときに、緑色のプールに突き落とされるなどは毎年恒例の儀式ともいえる。
あれは春先だったけど、気温的には変わらないと思う。
目の前を錦鯉が通り過ぎる。
ゆらりとゆれる尾びれと共に泡がキラキラ光って……

「ぶっわっはーーー！！」

勢いよく水から顔を出す。

死ぬ、死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ！！

必死に灰に酸素を送り込むのと同時に顔についた水をはらう。
池の水なんてどんな微生物がいたものかわかったものじゃない。

「ふー、ふー」

ザバっと池からあがる際に、水を吸って重くなった服が体に絡みつく。

（寒い・・・。）

あまりにも冷たかったので、外の気温が暖かく感じる。
指先がもう氷のように冷たい。膝を折り地面に座り込む。
体を大量の水滴がつたって地面に落ちる感覚が気持ち悪い。
腕を池のへりにあずけまぶたを閉じる。

（つかれた……）

ふいに、タオルで体を包まれる。
きっとお姉ちゃんが気づいてきてくれたのだろう。
柔らかい感触にほっとする。
全身を包まれると力強い腕に持ち上げられた。
やがて聞こえてきた規則正しい鼓動の音を聞きながら、眠りに落ちた。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「…………ここ、どこですか？…」

目を覚ました私の前に飛び込んできたのは、天蓋付きベッド。
そして、なんとも愛らしい家具たち

……たしかに、私の部屋にはベッドがおいてあるし、可愛いものも少しはある。
しかし！だ、我が家は築１２０年の日本家屋でございますよ！！
こんなレースとフリルとリボンをふんだんに使ったお部屋なんて歴史の教科書の
写真でしかみたことありません！！

明らかに自分の部屋ではない光景に頭の中が混乱する。

（…夢……？）

手の甲でぐいぐいと目元をこする。
ついでに伸びもして、眠っていた神経たちを呼び起こす。

（……変わらない…）

何度、目をまたたいても、景色は一向に変わらない。
むしろ、クリアに広がる景色が「現実」なのだと呼び起こした神経にうったえかけている。

手に触れるシーツの感触が実際のものだと理解すると、体の奥がなぜかむずむずする。

「……どうしよう…。」

むずむず感に堪えられず、ベッドからおりる。
辺りをみまわすと扉が三つあり、明らかに装飾の少ない二つに近寄る。
近いほうのドアノブをまわし、扉を開ける。

中には洗面台とお風呂があった。
そしてその隅のガラス板の向こうには、洋式トイレが佇んでいた。

「よしっ！」

思わず声をあげる。

異世界トリップ1日目の朝の出来事。

第1話：生活リズムは崩せない（後書き）

希ちゃんは、朝起きたらすぐトイレ派です。
こんなに図太くなるはずじゃなかったんですが・・・

第2話：寝起きはボーっとしてるものです！（前書き）

（　）内は希ちゃんが意識して考えてる事です。

第2話：寝起きはボーっとしてるものです！

「ふー、落ち着いた～。」

顔も洗って、すっきり度１００％で最初の部屋に戻る。
やっぱり、そこはお姫様チックなお部屋だったけれど
さっきよりは気分も落ち着いて、冷静に頭が働きそう。

もう一度しっかりと部屋をぐるりと見回すと大きな出窓があった。

（！！あれは！）

小走りで、窓に近づく。

（ああ、なんということでしょう……この出窓…
ピーターパンのウエンディのお部屋にそっくりです
この大きさといい、段になって腰掛けられるのといい、何よりもこのクッションのふかふか加減！！
私の想像そのまんまではありませんか！！）

ビィフォアー〇フターのアナウンサーばりの解説で出窓をほめたたえる。
右手を伸ばしてクッションの感触を堪能するだけではたりなくなって、そっと薄いピンクのクッションで覆われた段に腰掛ける。
クッションの弾力が私の体重を軽く押し返しながらも、やさしく包み込んでくれる。

何コレ！？すごく心地いいです！
純日本家屋の我が家には、ソファなんてものなかったし、ましてや出窓なんておしゃれなものなかったもんなー。

我が姉様の「体が痛いからベッドがいい」発言により、数年前からベッドが導入されたけど、ニ〇リのパイプベッドは軋むので寝返りを打つたびにキィキィと鳴った。
夜、廊下を歩いているときに、誰かの部屋からキィキィ音が漏れてきたときは心臓が止まるかと思った。

夜中の小さな音が怖い。これぞ日本家屋あるあるだ。

視線を窓の外に写すと広い庭園が見えた。
噴水を中心に迷路のように庭が広がっている。
緑の迷路には色鮮やかな花も咲いていて、パッと庭を明るく見せている。
心なしか小鳥のさえずりも聞こえてくる気がする。

（あの花、薔薇かな？薔薇だといいな。
やっぱりこんなに豪華なお庭には薔薇が似合うもんね。
……ホント、すごいなぁ…なんかお城みたい…）

小さいころはお姫様とかが大好きで、よくお姉ちゃんに遊んでもらったなぁと幼き日を思い出すと笑みがこぼれた。

（まぁ、たいてい私が侍女役だったけどね……）
口元の笑みが苦笑にかわる。
視界にキラキラと光る取っ手を確認する。

（窓、開くかな…？）

目の前にある金具に手を伸ばす。
つまみをつまんで回すとカチャっと音がした。
取っ手を握ってぐっと押してみるがびくともしない。
たてつけでも悪いのかな。
さらに力をいれて押してみるが結果は同じ。

これは……「押してだめなら引いてみろ」ってやつ！？
だとしたら、ものすごく恥ずかしいんだけど…。
十回くらい押してたよ…。

ごくりとのどを鳴らし、勢いよく手前に引く。

パキッ

小さな音と同時に感じる浮遊感。

直後にどんっと背中に痛みを感じる。

「いっつ〜〜〜」

背骨打った・・・。

背中をさすりながら、手の中のものをみて青ざめる。

（ぎゃーーーーーー！！

壊した？壊れた？壊した！！！壊しちゃったよ！！

どーしよう！！やっぱりコレってあれですか。

高いですか？高いですよね！？いやにピカピカ光るものが装飾に使われてますからね！

しかも、こんなお城みたいなところのものなんて弁償できる額じゃな…ぃ…）

お城？――どこが？

弁償？――誰に？

……あぁぁぁぁぁぁーーーーーーーーーーー！！

（そうだよ、ここ何処ですか！そしてこの格好なんですか？）
思い出した現状に混乱しながら自分の着ている服を見下ろす。
―――リボンとフリルたっぷりの白のワンピースって！
手がじわじわと嫌な汗で湿ってくる。

（落ち着け！冷静に考えろ、自分！！）
さっとその場で正座をし自問自答をはじめる。
（ここはどこ？――――お城です……多分
何でここにいるの？――――わかるか！
日本だよね？――――……。）

数十秒思案したのち信じられない結論に達したが、まだ決め付けるのは早い……よね？
物事はしっかり確認することが大事である。

（大丈夫、ここがどこかもうすぐわかるはず！！）
ぐっと右手を握り締める。

コンコン

ガチャ

ノックの音に続きドアノブが回される。

扉を開けて入ってきたのは、茶髪の男だった。

思わず目を見開く。

（どうしよう……。全然わっかんない！！）

――――希の考える日本ならば黒髪、王道なら金髪論は通用しなかった。

第3話：初対面の人との距離は大切です（前書き）

今回は短めです。

第3話：初対面の人との距離は大切です

扉を開けて入ってきたのは、茶髪の人でした。

目を見開いている私をみて何を思ったか男も目を見開く。
何だろうといぶかしむと、すぐさま男は同じような表情をする。

……真似してるんですか？
いや、馬鹿にしてるのか？

じっとみつめてくる視線に耐えられず頭をさげるとすぐに

「大丈夫ですか！？」

と男が駆け寄ってくる。
男はさっと方膝立ちになり、左手に壊れた（壊した）取っ手を握り、
正座をしている私の腰と首の後ろ辺りをしっかりと支える。
腰に回される手にびくりとしてしまい、思わず上体が前に倒れる。
前にいた男の肩にあごをのせる形になってしまった。
男の体が一瞬ぴくりと動いたと思ったら、なぜか今までよりもしっかりと抱えられる。

……あれ？なにこれ、なんか体が包まれてる感がするんですけど！？
これって、別の言い方をすれば抱きしめられているともいいませんでしたっけぇ！！

心の中で悲鳴をあげる。
バっと体を後ろへそらすとハシバミ色の瞳と視線がぶつかる。
距離にして約１０ｃｍ。
近くでみる男の顔立ちに口を鯉のようにパクパクとさせる。

…あ、あぁ……ぃっ、イケメンじゃぁありませんか！！

少し切れ長の目、薄めの唇、コーヒー色の髪の毛は少し短めだった。
なんといってもキメの細かい肌は、黄色人種でも、白人ともすこし違う色をしていた。
そのことが、私の推測を後押しする。

「顔が赤いですね……風邪でもひかれましたか？」

声をだせない私をよそに男は手を私のおでこにそっとあてる。

いいいいいいややややややぁあ！

叫びたい衝動を必死にこらえ主張する。

「だっ、大丈夫です！！」

男の手を振り切り、さっと立ち上がり数歩後ろへ下がる。
男も立ち上がりせっかく広げた距離を詰めながら心配そうに声をかけてくる。

「熱はなさそうですが、顔が赤いのは心配ですね」
「いっいえ！全然いりません、心配！！」

なんか文法がおかしくなったけどこっちは必死なんです！
平凡な女子校生にあなたの顔は破壊力ありすぎなんですよ！！

近づいてくる男に顔の前で手をふって、いりませんアピールをする。
そしてまた数歩下がる私に男の目尻が少し下がったように見えた。

（……ん？笑われた？）

ちょっとむっとして見ると、男はさっきと変わらず心配そうな顔をしていた。

（…気のせいか……）

第3話：初対面の人との距離は大切です（後書き）

急いで書いたので手直すかもしれません。

第４話：つぶやきは無視されるのが世の常です（前書き）

途中から視点が変わります。

第４話：つぶやきは無視されるのが世の常です

「失礼します。」

目の前の男から数歩下がった瞬間かわいい声とともに１６歳くらいの女の子が入ってきた。

あっぶなー！！あと数十秒早かったらいろいろとおかしな事になってたよね！？

……いや、もしかして見てて入りづらかった可能性とかもあり？

あぁぁぁ、あれはちょっとした事故ですから！

そりゃ最後なんかギュってなりましたけど、そういうことじゃないですよ！……ね？

ちらりと男を盗み見ると少女の方に振り返り、私の前に来るようにうながしていた。

少女は足早に近づき男の横に並ぶ。エメラルドグリーンの瞳が部屋に差し込む光できらきらと輝く。

少女が横に並ぶと、男は流れるような仕草で私の手をとり、ちゅっと小さく音を立てキスをした。

えーーーーーー！！

この流れでしますか普通！？

絶対いりませんよね？

ほら、隣の子目細めちゃってるよ！

エメラルドグリーンの瞳がすぅっと細められるのが視界に入った。

こんなこと普通の人にやられたら吐き気がするだろう。
それでも、いきなりで意味不明な行動があまりに自然で様になっているから、むしろカッコいいとさえ思ってしまう。
イケメンって恐ろしい。

「ご挨拶が遅れました。クイスピス国騎士団、第一部隊副隊長のシュゼ・ハクス・アーベルです。」

男――――シュゼは顔を上げにっこりと告げた。
…騎士団？ってかクイスピス国って言った？

シュゼが後ろに一歩下がると、今度は女の子がきれいな仕草でお辞儀をする。
腰まで届く蜂蜜色のふわふわカールヘアがゆれる。

「今日から侍女としてお世話をさせていただきます、ゼラ・リース・クラウドです。」

にっこりと微笑むゼラは天使みたいにかわいい。
けど、そろそろ真面目に確認したいんです。
がんばってゼラの天使の笑みを真似ながら自己紹介をはじめる。

「木佐原希です。あの、一つ確認したいんですがここって日ほ「異世界です。」……なんですか。」
「それって、異世界召喚とかいうの「ではないですよ。」……ですか。」

笑顔で私の疑問を全否定してくるシュゼ。
しかもわざわざ被せて。

「そう、ですか……。」
力ない返事を返す私。
「あら？驚かれないんですか？」
不思議そうに私をみるゼラに苦笑いを返す。
「えぇ、まぁなんとなくそうじゃないかと思ってましたから……。」
いやさ、信じたくなかったけどね？
言葉をかぶせてくるくらいの勢いで全否定されたら、現実として受け止めるしかないでしょう……

ショックで放心状態の私の事は無視して話は進む。
「そうですか。ではまずは着替えていただきましょう。ゼラ。」
シュゼがゼラに声をかけるとゼラが私をベッドの方へとうながす。
ゼラは私をベッドに座らせるとプチプチと私の前ボタンをはずしていく。
ピッピー、イエローカード
「ちょっ、いや、ひとりで着替えれるよ！！？」
危ない、うっかり脱がされるところでした。

（お決まりだから予想はしてたけど、服くらい着替えられるし、だいたいシュゼの前では脱げないって！）

ちらりとシュゼを見やるとちょうど部屋から出て行ったところだった。

行動が早くて何よりです。

「いえ、コレが私の仕事ですし、着方がわかりませんでしょう？恥ずかしがらないで下さい。」

困ったように笑う姿はやっぱり天使のもので、うなずきそうになる。しかし、ここで負けてはいけない。いくらなんでも、自分より年下の子に着替えを手伝ってもらうなんて気分が悪い。

「で、でも、見たところパンツスタイルだし、大丈夫だよ！だからゼラちゃんは外で待ってて？」

ここはゆずらない！！といった顔で言うとしぶしぶながらも了承してくれた。
ドレスならともかく、パンツなら大丈夫だろう。

「……わかりました。ですが、わからないところがあったらすぐに呼んでくださいね。あと、
どうかゼラとお呼びください。」

そう言い残すと手に持っていた服を私に手渡して、ゼラは扉を開け

て出て行った。

（異世界か……
まさかそんな事が本当に、しかも自分に起こるとはね…）

手渡された服に着替えながら、クラスで流行っていたラノベを思い出して微笑する。

（…まぁ、がんばってみますか……）

出窓からさしこむ光がキラキラとよく晴れた青空を背景に光っていた。

「でも……私、もどれるんだよね？」

つぶやいた言葉はぽかんと開いた口に吸い込まれた。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「あなた、いつからそんなキャラになったの？」

ゼラは廊下に出ると、壁に寄りかかっている幼馴染に声をかけた。

「や、だってあの子の反応かなりおもしろいじゃん。思ってることがすぐ顔に出るし。」

さっきとは打って変わって砕けた調子で答えたのは――――シュゼだった。

「確かに私も、こんな小さい子にお世話してもらうなんて！っていうような顔されたけど、今日からは私のお仕えする方なんだから、からかわないでほしいわ。」

ぷぅっと頬を膨らます仕草はどこから見ても幼い少女にしかみえない。

「おい。２６にもなる女がそんな事するなよ。」

シュゼはやれやれといった表情で首を軽く揺らす。

「あら、でもキサハラ様は自分より年下だと思ってるわよ。」

「その見た目で今までどれだけの奴が騙されてきたか………全く、恐ろしい隊長だぜ。」

クイスピス国騎士団、第一部隊隊長、ゼラ・リース・クラウド。

これが彼女の本当の肩書きだった。

「失礼なことを言うのね。……で、言われたとおり彼女に渡してきたけど、いったいどういうつもりなのかしら。あの人は。」

「さぁな、あー早く出てこないかなぁ。」

うーんと考え込むゼラをよそにシュゼがくっくっと楽しそうに笑う。

迎えにいった部屋には１６歳くらいの少女がうずくまっていた。

自分を見るなり見開かれた瞳は漆黒だった。

———夜の王（ルノ）を連想させる黒真珠のような瞳と、上質な絹のように艶やかな黒髪に思わず目を見開く。

直後、少女の眉間にしわがより、がっくりとうなだれる。

正直、あせった。

少女の目が覚めた事は１０分以上前に知っていた。

だが、そう深く考えずのんびりとここまできてしまった。

彼女を守るのが、与えられた自分の役目。

もし彼女が慣れないもので怪我をしてしまったというなら……それは自分の責任だ。

急いで駆けつけ体を支えると、トンっと体を預けてきた。

その行動があまりに無邪気で愛らしく感じられた。

指に絡まる黒髪のやわらかさに儚さを感じ、腕の力を強めてしまう。

そっと少女の頭をなでようとすると、バっと体をそらせ目をまん丸

に見開く。
今にも消えそうな儚さをまとっていながらもその瞳には強い光が宿っていた。
その瞳をじっとみつめていると、急に何か言いたげに口を開けたり閉じたりしはじめた。
その顔は真っ赤だった。

照れているのだとわかると少し意地悪してみたくなった。
おでこに手をあててみれば急に立ち上がり、大丈夫だと主張された。

おもしろい。

ちょっとからかってみればすぐ思っていることが顔にでてあせっているのが見てとれる。
さらには一歩近づけば一歩下がるしまつ。
さっきまでの儚さはどこへいったのか、微塵も感じられなかった。

必死に間をとっていた少女は次はいったいどんな反応をみせてくれるのか。

「はやく、着替え終わらないかなー。」
小さく、つぶやく。

第5話：いじめを受けたら白旗を

口がぽかんと開く。
あぁ……今日で何回目？この動作。
これはきっと癖になってるなと思いながら自分の格好をもう一度確かめる。

白のシャツに、チェックのベスト、ネクタイに黒っぽいのジャケット。
そしてパンツはパンツでもブーツの中に入れるアレ。

なんだろうね、この英国紳士感？
「お手をどうぞ、レディ？ちゅっ」みたいな事やりそうな感じ？
やっぱりこれってさ、あれだよね。

いじめ？

いじめですよね？だってさ、だってさ！？

さっきまで私が着てた服ワンピースだし！た、体型だって平均以上ですよ？

……嘘です。ごめんなさい。よくて平均です。

どっちにしてもさっきまであきらかな女の子服着させられてたんだから、これはもういじめ決定ですか……。
だってコレ、どっからどうみても男物だもん……。

部屋の隅においてあった姿見で自分の姿を確認し、肩を落とす。
なんでだろう、さっきのワンピースよりもこっちの方が似合っている気がするのは。
二重のぱっちりとした目と抜いたり画いたりしていない形のよい眉がりりしく、中性的な顔にみせているのかもしれない。
それでもやっぱりこの格好に長い髪は似合わないので部屋においてあった白いリボンで髪の毛を後ろで結ぶ。

（……男だ……）

姿見に映っていたのは、ジェントルマンという言葉が似合いそうな青年だった。

（……すごいこれなら学祭で男子役やってもよかったかも……）

女子高の学園祭での演劇の出し物はたいてい恋愛ものなわけで、
必然的に男装する生徒がでてくるわけだ。
いまどき珍しい胸下まで伸びる黒髪という容姿から主役に抜擢されたのはいいが、浮かれて家族に話す必要はなかった。

（……いや、やってたら絶対に殺されてるな…）

がっくりとうなだれていた顔をあげると、もう着替え始めて３０分も経っていた。
二人を廊下に出したということはすなわち３０分廊下に待たせていることになる。

（急がなきゃ！！）

身なりをさっと整え、ベッドの上に散らかしたリボンの束をまとめ、二人が待っている廊下へ続く扉を勢いよく開けた。

「……似合っていますね…。」
「えぇ、とても…。」
飛び出してきた私の姿を見てうんうんと頷く二人。

えぇぇーーー！
あぁ……これも何回目？…

じゃなくて！そっちでしたか！
だって私のこと女だとわかってて男物きせていじめてるなら
「ふん！あなたにはお似合いよ！」
「その貧相な体にはやはりその格好が合いますね。」
みたいないじわる発言がくるはずだからこの裏を感じられない賞賛は……
男だと思ってたって事ですよね…。
……ん？
それじゃあ、さっきのワンピースは？女物を着せるっていういじめでしたか！？

結局、私の性別がどっちでもいじめられてるんじゃん！！と脳内で嘆きながら、ジャケットの胸ポケットから見える白いハンカチに手を伸ばす。

ひらひらひら……

「……何しているんですか？」
シュゼがきょとんとしながら私の振っている白いハンカチに目を向ける。

「……降参です。すみません、言われたことはきちんとしますんでいじめないで下さい…。」
しょぼしょぼと告げる私にゼラは大慌てで
「いじめてなんていませんよ！？」
と否定する。

でもね、どうみたっていじめでしょ。

「男装しろと言うのならしますけど、こういうやり方は精神的なダメージが……。」
ですから……と続ける私の前でくっくっと笑い声が聞こえる。
視線を上に向けると、シュゼがおかしそうに笑っていた。

「くっくっ……その服男物だとわかっててて着てきたの？あんた。しかも髪まで自分で結んでるし。」

そーですよ、わかってましたよ、いじめだってことは！！……って、え？

「申し訳ありません！そういうつもりで似合っているといったわけではないんですが……本当にキサハラ様がお綺麗で…。」
必死に謝罪をするゼラはやっぱりかわいい。でも、そんなことより聞き捨てならない言葉が……。

「……そんなキャラでしたっけ？」
ゼラの言葉を無視してシュゼに質問するのは気が引けるが…
…許してください！私の騎士に対するジェントルマンイメージが危機に陥っている気がするので！！

ゼラに視線だけで謝り、シュゼに視線を戻すとシュゼはにっこりと上品な笑みを浮かべていた。
そして――――

「はじめまして。シュゼ・ハクス・アーベルです。」

ちゅっとリップ音をたて、私の頬にキスをした。

「っ！！」
あまりの衝撃に背後に倒れこむようにして数歩さがる。

ゴッ

後頭部の痛みとともに遠ざかっていく意識のなかで、がっしりとした腕に支えられた気がした。

第5話：いじめを受けたら白旗を（後書き）

急ぎ投稿なので誤字・脱字があるかもしれません。

第6話：お間違えにご注意ください

寝返りを打とうとすると、ぐわんとした痛みが後頭部から顎にかけて感じる。
（頭、打ったんだった……。）

頬にあたる枕のカバーがさらりとしていて気持ちいい。
きっとゼラがベッドに寝かせてくれたのだろう。
（ゼラには後でお礼を言わなくちゃ。）
ベッドに運んでくれたのは気を失った自分を支えてくれた腕の持ち主だろうがもとの原因はその人なわけで、お礼をいうつもりは毛頭ない。

後頭部に感じていた痛みがひき、うっすらと目を開ける。
部屋に差し込む光があまり変わっていないからそんなに気を失っていたわけではないようだ。
ただ一つ気になったことがあった。

このキラキラふさふさの物体なんですか？

何だろうとじっと凝視していると金色の物体Xはもぞもぞと動き始め、ひっくり返った。

「あ、おはよう。」

にっこりと言ったキラキラふさふさの物体Ｘ（エックス）は王子様だった。

「ひっ！！」

体をびくりと震わせ絶句する。

誰コレ、何コレどこの王子様ですか！！

「あはは、そんなに驚いた？」

金髪男は朗らかな笑顔をうかべ、頭、大丈夫？痛くない？と続ける。

「だ、大丈夫ですけど……どちら様でしょうか？」

見ず知らずの男と添い寝をしている状態にどぎまぎしながら聞く。

「あぁ、僕？僕は、この国の「王子！！なにをしてらっしゃいますの！！？」…。」

金髪男の自己紹介を遮って、かちゃりと扉を開けて入ってきたゼラが大声をあげる。

「あ、ゼラ！寝かしてくれてありが……」

ゼラの方を向き、体を起こしてお礼を言おうとするが途中でとまる。

……ん？今、王様のご子息の総称的なものが聞こえたんですけど……

「王子様！！？？」
バッと体を起こし金髪男を見る。

「うん、そう。王子様。」
にこにこと自分を指差す金髪男…・もとい、王子様。

……なんですとーーーー！！？
確かに、キラキラ金髪ですしキラキラオーラ絶賛発生中ですけど！
なぜにここにいるんでしょうか！？

「いついらしたんですの？」
ゼラがベッド近寄りながら王子に尋ねる。

「さっきだよ。ゼラたちが廊下でじゃれあってたときに。」
ベッドから体を起こし、立ち上がりながら答える王子の顔は笑顔だった。

「申し訳ありません。」
とうつむくゼラにもうなずける。
だってそのときの王子様の笑顔は———

……あなた本当に王子様ですか？

魔王様のものだった。

「ま、君たちに限ってそんなことは起きないと思うけどね。」
一応ね、と王子が朗らかに言えば肩に重くのしかかっていた真っ黒なオーラが、一瞬にして消え去る。

なんなのでしょうか、今の魔王様オーラは……

唖然としてゼラと王子様をみくらべてると

「あぁ、ちゃんと説明するからね。で、シュゼは生きてる？」
心配しないでといった顔で私を見る王子様にこくりと頷くが、またしても気になる言葉が…

……生きてる？なんですかそれ！？シュゼさんに何があったんですか私が倒れてた間に！

そろりとゼラをみると、えぇまぁ。と苦笑。

ゼラさん？……なんで残念そうなんですかぁ！？

「生きてる。トラブルがあってレオの部屋まで連れて行けなかったんだ。悪い。」

よたよたと部屋に入ってきたシュゼが生存宣言をする。

「ん、別にいいよ。僕の部屋でもここでもたいして変わらないし。それより僕は、なんでこの子がシュゼを見て顔を赤くしてるのかしりたいな。」

そう言われ、頬に手をあてれば熱をもっているのが感じられる。

（ひゃ～、だって、あんな事されればだれだってこうなるよ！！）

三人の視線に耐えられず下を向く。

「い、いや別にあいさつをしただけで……。」

何でもないんだとわたわたするシュゼに沸々と怒りがこみ上げる。

（「別に」って何！あれは重大事件でしょ！！乙女の純情をからかうなよ！！）

シュゼをベッドから見上げた瞬間、再び空気が変わる。

あれ？なんだろうこの感じさっきも……

身に覚えのある感覚に首を回転させ王子様を見ると

「とりあえず、朝ごはんでも食べながらお話しようか。」

魔王様が再降臨していた。

第６話：お間違えにご注意ください（後書き）

活動報告の方も見ていただければ幸いです。

＊追記＊

すみません、話を追加しました。

第7話：感謝の気持ちをもって？

「とりあえず、朝ごはんでも食べながらお話しようか。」

魔王様の再降臨にシュゼの顔が一気に青くなる。
地を這う黒く重たいオーラに一同動けなくなる。

……なんですか？この絶対に王子様にいらないスキル！
オーラで動けないとか意味わかりませんよ！？

口内で舌を回し、唾液でのどを潤わしてから口を開く。
「あ、そうですね。朝ごはんまだですし、王子様にいろいろ聞きたい事もありますから。」
必死に王子様に話かける。

「だよね。じゃあゼラ、持ってきて。」
王子様の発言に時が動き出す。
温度が上昇したのを感じ、ホッと胸をなでおろす。

「かしこまりました。」
ゼラが一礼して、装飾の少ない扉に消えた。

!!消えた!!

消えた。本当にゼラは消えたのだ。取っ手に手を掛けたとたんパッと。
いうなればハリーとかいう少年が赤毛の子に出会い、4と2分の3番線を目指し壁に激突していくといったのと同じ現象が起こった。

「……ま、魔法?…」
目を細め、部屋の隅の扉をじっと見つめながらつぶやく。
「あー、やっぱり君は魔法のない世界から来たんだね。」
右側から聞こえる王子様の声に横を向くと――

ゼラが窓側の丸いテーブルに並んだ料理を取り分けていた。

……うそーん。
……あぁしまった、これではどこかのお祭り男と同じじゃないか
ただ呆然と目の前の出来事を眺める私に今度は左側頭上から声が聞

こえた。
「くっくっくっ…」
見上げればシュゼが耐えられないというように笑いをかみ殺していた。

ぷちーん。
何笑ってんですか！！すみませんねぇ、魔法をしらなくて！！
さぞおかしくみえたでしょうね。凝視している反対側にお目当ての人がいるのに気がつかないという状況は！！

笑われた羞恥とイライラにまかせベッドから勢いよく立ち上がり、その拍子にシュゼの足を思いっきりふんづけてやった。

…なにが悔しいって？「痛み？なにそれ、驚いただけだけど？」っていうシュゼの表情にかな。

ずかずかと大股でテーブルにつく。その様子を口元に笑みを浮かべながらみていた王子様も反対側の席に座った。
「いただきます！！」
両手を合わせ手じかなスープを飲む。
ふわっと香る香りがどことなくコーンスープを思い出させる。

「ゼラ！！これすっごくおいしいよ。」
顔を上げにっこりと微笑むと、よかったですと微笑み返してくれる。
炒め物みたいな料理もおいしかった。
卵料理らしきものに手を伸ばすと、いつの間にか隣にいたシュゼがお皿をひょいと持ち上げ取り皿に分けてくれた。

少しだけフンっと思う気持ちもあったがお礼を言うことは大切だ。
「ありがとうございます。」
顔を見上げると、シュゼの口端がちょこっと切れていたのが気になった。

「どうしたんですか？口。」
自分の口元を指差してみせる。

（私が倒れる前にはなかったのに……
さっきのゼラの反応といい、王子様の生存確認といい、やっぱり何かあったんだ。気になる……。）

「あぁ、……気にすんな。それより、頭平気か？」
悪い、と少し頭を下げて謝るシュゼに教えてくれないんだと思いつつもうん、と頷く。

「平気です。でも私何にぶつかったんですか？先がとがってたような気がするけど…。」
あのとき自分の後ろには部屋へとつながる扉しかなかったはずだ。

「それは、コレですわ。」
ゼラがすっと黒い塊を私に手渡す。

……天狗？

いや、アントニオ〇木？
そうだきっとそうだ。

手渡された物は金属のような物でできているお面だった。

このにょーんとしてるのってあごだよね。
…長いなあご！！手のひら一個分くらいの長さあるけど！？

まさかコレが？とゼラをみるとこくりと頷く。

後頭部にクリティカルヒット☆
ってわけですか……

「……なんでこんなの飾ってるんですか？凶器ですよコレ。」
体験者として一応、危険性を教えておく。

「凶器というか、魔よけなんだけど……。」
申し訳ないといった顔で王子様が教えてくれる。

魔よけなんですかコレ！？
道を歩けば各々の家の扉にはコレが飾ってあるんですか！？
……怖いなこの国。

改めて魔よけを見ると子供がみたら大泣きするであろう顔をしてい

る。
じっと魔よけを見つめる私に何を思ったか誇らしげに王子様が教えてくれる。
「それは、君のためにつくらせた特製物だよ。」

「……。」
「……？」
「…あ、ありがとうございます。」
「うん。」

このとき希が心の中で思った事は後に撤回することとなる。

第7話：感謝の気持ちをもって？（後書き）

おまたせしました。
更新予定を活動報告の方に書いておくのでご確認ください。

第8話：感謝の気持ちをもって（前書き）

基本設定です。

第8話：感謝の気持ちをもって

「それで、あの、私この世界になんでいるんでしょうか？」
しっかりと王子様の方を向き、一番聞きたかった事を聞く。

「うーん。ごめん、わかんないだよね。」

……わかんない？

わかんないってなんですかそれ！？異世界トリップですよ！？もっといろいろあるでしょうが普通！！

私の眉間にしわがよるのを見た王子様はまぁまぁと話しだす。
「水の都って知ってる？」

何それ？とふるふると首を横にふる。

「そっか……。
あのね、この世界には精霊というものがいて、いろいろな加護を僕たちに分け与えてくれているんだ。　気候やその地になる食べ物の量もこの精霊の種類や数によって変わるんだ。
そしてなぜか大陸の中心に位置するこのクイスピス国にはたくさんの精霊がいてね、とても豊かな国なんだよ。だからこの国を手に入れたい国は多いんだ。

それでも、この国は近隣の国との小競り合いから世界を巻き込む戦争までありとあらゆる争いをしては勝っていたんだ。圧倒的な武力を誇る国だったんだよ、この国は。」

王子様が水が入ったグラスに手を伸ばしぐいっと仰ぐ。

（だった……？）

いぶかしむ私に王子様が話を続ける。

「死滅しはじめたんだ、精霊が。あるとき、急にね。

この世界の魔法は、精霊の力を借りて使うものだから、みんなが慌てた。そのときも大きな争いの最中だったからものすごい混乱だったらしい。それでも、争いは終わらなかった。むしろクイスピス国が精霊を独占していると、この国に各国の兵が押し寄せてきた。血に酔っていたんだよ。だれにも止められなかった。そしてその間にも精霊は数を減らしていた。

天候は荒れ、川の水は汚れ、木は枯れる。大地は人々の血で真っ赤に染まった。そのときになってやっと人々は自分たちの罪深さが分かったんだ。悪夢の時代だよ。

そんなとき、世界に強い精気が流れたんだ。瞬間、わずかだけれど精霊の数が増えた。

精気を感じることのできる魔術師たちは探した、希望の光を。でも、誰も見つけられなかった。

ただ、不定期に精気は流れ、すこしづつ、確実に精霊の数を増やしていった。争いが終わって世界はひとまず平和になった。それでも治安はなかなか良くならなくて、いまでもスラムが残っているよ。

この国では治安の取り締まりに、闇の光（イージス）という軍団ができてあっという間に国家が再建したんだ。そしてそのころ、見つかったんだ。」

気づけば、目の前には暖かい紅茶が用意されていた。
一口すする。

「国家が再建して3年程経ったころ、王の即位式が行われたんだけれど、そこに一人の歌い手が来たんだ。町で評判の異国の歌を歌う黒髪黒目の乙女だった。
女の口から紡ぎだされたのは水の都に住む末姫が地上の王子に恋をし、魔女と契約をかわし地上へ王子に会いにくるという恋物語だった。人々は女の歌に酔いしれた。世界に精気がながれているのを知らずにね。ただ、幸か不幸かその歌を一人の魔術師が聞いていたから、ようやく精気の源を見つけることができたんだ。
その後女は城に上がり、歌を歌っては精霊の数を増やしていったんだ。」

そこで王子様が一息つく。
「なるほど、それでこの国は平和になったんですね。」
すごいなその乙女、と感心する。

「それで終わればよかったのにね。」
と意味深発言を残し王子様はまた話しはじめる。

「君の言うとおり、精霊が増えて世界は平和になったんだ。けれど、この国は違った。ひずみができてしまったんだ。
闇の光（イージス）のトップである夜の王（ルノ）が水の都を歌った乙女を殺したから。
皮肉なことに、そのときの夜の王（ルノ）は王の弟だったんだ。
夜の王（ルノ）は生まれながらにして決まっていて、類まれな能力をもつ人

が必然的になるようになっているんだ。初代夜(ルノ)の王がこの国の闇を消し去るために有能な人材を、という世界にかけさせた願い……いや、呪いだったんだろうね。乙女を殺した夜(ルノ)の王にとっては。王家という身分に生まれながら、その手で闇を消している自分。なのにこの国は、世界は乙女を必要としているというやるせなさ。乙女が倒れていたのは外の噴水の傍だよ。そしてこれは知っている人は少ないけれど、初めて精気が流れたときの発信源はその噴水なんだ。だから、その乙女は水の都から来たとされてるんだよ。」

ふぅ、と息をつく王子様。

（なんか……すごく壮大な話……。）

しんみりとこの国の昔話にひたっていると、ふと、思い当たる節があった。

（乙女の歌った歌って人魚姫に似てるなぁ……それに噴水ってあれだよね。）

出窓から見えた噴水を思い浮かべる。

……ちょっとまて！？

「あの、私って最初どこにいましたか？」

恐る恐る尋ねる。

「噴水の所だけど？」

覚えてるでしょ？という王子様。

その辺りの記憶は曖昧なんですよ王子様。
あぁ、嫌な予感がする……。

「もしかして、私って……？」
返事を促す聞き方をする。
「乙女なんでしょ？」
あっさりと答える王子様。

でしょ？じゃないって！！
そんなの今はじめて聞きましたよ！

（……でも、なんで私がここにいるのか分かんないって言うのは、
その当時の乙女が精霊を増やしたから
私にする事はないって事だよね…。それなら、まぁ乙女でも…。）

こういうのはいつか帰れるから、と楽観的な思考になりかけたとき、
ある事を思い出した。

（当時の乙女は夜の王（ルノ）に殺されたんだった！！）

「あの、闇の光（イージス）ってまだあるんですか？」
あせって尋ねる私に王子様は困ったように頷く。

「うん。でも、今の夜の王（ルノ）はそんなことしないだろうし、君が現れた事を知っているのはこの部屋にいる者だけだから安心して。それにほら、さっきの魔よけには結界を張る役目が備わってるから中か

ら開けないかぎり三人以外が部屋に入る事はできないよ。」

そう安心する情報を教えてくれた王子様に「ありがとうございます。」と感謝を伝え

（結界ナイス！！さっき、メッチャいらない！！とか思ってないからね？命を守ってくれてありがとう、アントニオ〇木！！）

と魔よけにも感謝する。

第9話：日本人に対する接し方は0点です

「さてと、じゃあとりあえず話も終わったし、騎士舎に行っておいでよ。」
アントニオ〇木ありがとう！！と両手をあげて叫びたい気分の私の耳はしっかりと王子様の声を聞き取ることができなかった。
……きしゃ？
もしかして騎士舎ですか！！？

「行きます。行きたいです。行かせて下さい。」
きっぱりと主張すると王子様にくすりと笑われた。

「女の子には申し訳ないけど、やっぱりあそこが一番安全だし、シュゼやゼラもいるからね。」
そう言って上品に椅子から立ち上がる姿が格好よくて思わず見とれてしまった。

だから
「僕は用事があるから一緒には行けないけど、喜んでくれてるならよかった。」
でも……と続ける王子様の顔が目の前に迫ったときには何も言うことができなかった。

「シュゼとばっかり遊んでちゃだめだよ。」

耳元で囁かれた言葉は頬にあたる柔らかい温かさできえた。

「おぉぉぉっぉおう、ぉう王子様！！？」
頬に手をあて椅子から勢いよく立ち上がる。
手にじわじわと熱が伝わってくるのを感じる。

何してんですかぁ！！？？い、今ほっぺにき、きききキスしましたよね！？
あの、しっとりとした感じ！いくらぼーっとしててもそれぐらいわかりますよ！！
……ま、まさかそのぼーっと顔が物欲しそうにみえたとか！？
いいえ、欲しがってませんから！！……

本日二回目のびっくり体験に脳内が下手をすれば運動会でも始まるのでは？というほど大騒ぎしていた。

「レオール・バシュ・クイスピス。レオって呼んで。あと、普段は敬語なしでいいからね。」

そんな私の脳内なんか露知らず、私にキスをした張本人はいたって普通に、じゃあね。と軽く私の頭をぽんぽんと叩いて部屋からでていった。

視線を横にずらせば、ゼラとばっちりと目が合った。
ゼラはにっこりと微笑んでくれたが、いたたまれない。
いつのまにか出窓に腰をおろし寛いでいたシュゼに目線の先を変えるが、特に何も。といった無表情な顔でわずかに首をかしげた。

…まさか、コレが普通なんでしょうか！？
初対面の人にちゅっちゅするのが！？

確かに、ここは欧米風だから文化も似ている可能性があるからありえないということはないとは思う。
でも、こちとら伊達に17年間日本人をやっているわけではない。
羞恥心は深く心に根付いているのだ。

「何？照れてるの？」
視線の置き場をどこにしようかときょろきょろする私にシュゼが口の端をちょっと持ち上げてフッと鼻を鳴らして問う。
あ、今鼻で笑ったな…。

「そんな事ありませんが？シュゼの時はちょっと驚いただけで、私の世界にもキスをする習慣ありましたし？」

私の国じゃないけどね。と心の中で付けたしながら、少し見栄を張る。

「あれ？さん付けじゃなくなった。」

ふーんとさして興味なさそうな返事をしたシュゼは気になったであろう疑問を口にした。

「あなたは敬称付けで呼ぶ人物ではないと認識されました。」

淡々と事実を述べる私にえー、と講義の声をあげるシュゼ。

最初のさわやかお兄さんはどこへ行ったといわんばかりの変わりように首をかしげる。

「大体なんでそんなにキャラが違うんですか？最初は……」

さわやかで、イケメンなお兄さんだったのに！！…なんて初対面で言いませんよ？

私は人との距離感はつかめる日本人ですから。

「だから、はじめまして。って挨拶しただろ？」

出窓の階段になっているところに腰掛け、自分の膝にひじを立てて頬杖をつきながらにやりと反応を伺われる。

うん。やっぱり敬称いらないね。

つかつかとシュゼの前に足を運ぶ。

頬杖をやめ、目の前にたつ私を見上げるシュゼの手をとる。

腕を引かれるようにして立ち上がったシュゼにんまりと笑ってみ

せる。
そして、つないだ手を持ち上げ、勢いよくしならせながら下ろす。

「いっ！！」
肩を押さえ、恨めしげに見つめてくるシュゼに笑顔でかえす。
「挨拶は、握手からが基本ですよね。」

その笑顔がレオのものとよく似ていたことを知るのはシュゼだけだった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5168y/

水の都の乙女

2011年11月30日18時45分発行